

日本女大人間社会 ○櫻井理恵

[目的]日本における産業の近代化の新たな観点として、大正期における木綿への機械捺染の導入と展開についてとりあげる。明治期においては技術の向上、施設の整備に莫大な資金が必要とされたため経営上は利益につながらなかったが、機械捺染の導入に際しては多くの期待がよせられ、経営は継続された。その後の機械捺染業、製品を研究することにより、日本の染色業における初の大量生産品の製造の経過について研究することとした。

[方法]大正期を通して発行された、「日出新聞」、「染織時報」、「日本帝国統計年鑑」をもちい、捺染機械導入によりもたらされる経営、製品開発、販路の変化についてとりあげる。

[結果]研究により以下2点が明らかになった。

1、大正期に入り技術の向上が図られ、製品の量産が可能となったが、日本国内や世界の経済状態に企業の経営が翻弄された。

2、国内向けには、擬銘仙、擬紺、更紗、輸出用には更紗が生産されたが、これらの商品価値基準はその意匠ではなく、染色堅牢性にあった。

銘仙、紺、外国製品の更紗の模倣を行い、輸入を激減させる等成功をおさめた捺染業にとって第一次世界大戦が大きな影響を与える。西欧諸国の生産力の低下は日本の生産力の増強には有益であったが、短期間であったために安定した経営力をつけるにはいたらない。設備や運転に巨額な資本が必要なため、借入金を抱える企業が多く、出資家の形勢が不利になると企業の経営が困難となった。しかし捺染技術は重視されたために、不況時代も経営維持を可能とする巨大な紡績会社の傘下に収まるなど経営の強化がはかられた。